

<p>5月24日 (日)</p> <p>歴代誌下 36章</p>	<p>「こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した」(21節)。南ユダ王国がバビロニアによって滅ぼされ、「この地はついに安息を取り戻した」という。逆に言えば、ダビデ家の王たちが君臨した間、地上に主なる神の安息は失われていたのである。今、私たちの国には主なる神の安息が実現しているだろうか。</p>
<p>25日 (月)</p> <p>エズラ記 1章</p>	<p>「主はかつてエレミヤの口によって約束されたことを成就するため、ペルシアの王キュロスの心を動かされた」(1節)。エレミヤの預言は(エレミヤ 25・11)、その七十年後に成就した。七十年は決して短くない。大井教会に重ねるなら、七十年前、現礼拝堂が献堂された頃の信仰の先輩たちの幻と祈りを今の私たちに向けて語られた言葉として聴くということか。</p>
<p>26日 (火)</p> <p>エズラ記 2章</p>	<p>「会衆の総数は、四万二千三百六十人であった」(64節)。エルサレム神殿が破壊され、異国の地に捕らえ移されたにもかかわらず、帰還した会衆の中に「祭司、レビ人、詠唱者(聖歌隊)、門衛」などの一族が数えられていることに驚く。七十年もの間、彼らはいつか帰還できる日を夢見て、子や孫たちに神の言葉を語り、教育し続けてきたということではないか。</p>
<p>27日 (水)</p> <p>エズラ記 3章</p>	<p>「第七の月になって、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民はエルサレムに集まって一人の人のようになった」(1節)。「第七の月」の十日は年一度の「贖罪日」であり、最も厳かな安息日として、どこに住もうと必ず守るべき不変の定めだった(レビ 23・27 以下)。帰還した民の新しい歩みは「罪を贖われた者として一人のようになる」ことから始まったのだ。</p>

<p>28日 (木)</p> <p>エズラ記 4章</p>	<p>「そこで、その地の住民は、建築に取りかかろうとするユダの民の士気を鈍らせ脅かす一方、…参議官を買収して建築計画を挫折させようとした」(4-5節)。エルサレム神殿の再建はさまざまな妨害を受け、たびたび中断させられた。「その地の住民」とは、捕囚の間にエルサレムで利権を得てきた者たち。しかし人間の利権で、主の計画を止めることはできない。</p>
<p>29日 (金)</p> <p>エズラ記 5章</p>	<p>「預言者ハガイと…ゼカリヤが…イスラエルの神の名によって預言したので…ゼルバベルと…イエシュアは立ち上がって、エルサレムの神殿建築を再開した」(1-2節)。「神殿＝ペルシアへの反乱拠点」と警戒した人々は、武力に威を借りて中止を迫るが、ゼルバベルたちに注がれている「神の目」ゆえに何もできなかった。私たちは何を恐れ、畏れるのか。</p>
<p>30日 (土)</p> <p>エズラ記 6章</p>	<p>「この神殿は、ダレイオス王の治世第六年…に完成した。イスラエルの人人、祭司、レビ人、残りの捕囚の子らは、喜び祝いつつその神殿の奉獻を行った」(15-16節)。人びとがエルサレムに帰還して約二十年。さまざまな困難をくぐりぬけて神殿は再建された。しかしその神殿は決して絶対なものではなく、主イエスは信仰の中味を問い続けられたことを覚えない</p>
<p>31日 (日)</p> <p>エズラ記 7章</p>	<p>「わたしたちの先祖の神、主はほめたたえられますように。主は、このようにエルサレムの神殿を栄えあるものとする心を王にお与えになった」(27節)。ペルシアの王アルタクセルクセスを通して主は、イスラエルの民をエルサレムの地で礼拝ができるように助けてくださった。神が備えておられる助けは今も聖霊という働きによって私たちに与えられている。</p>